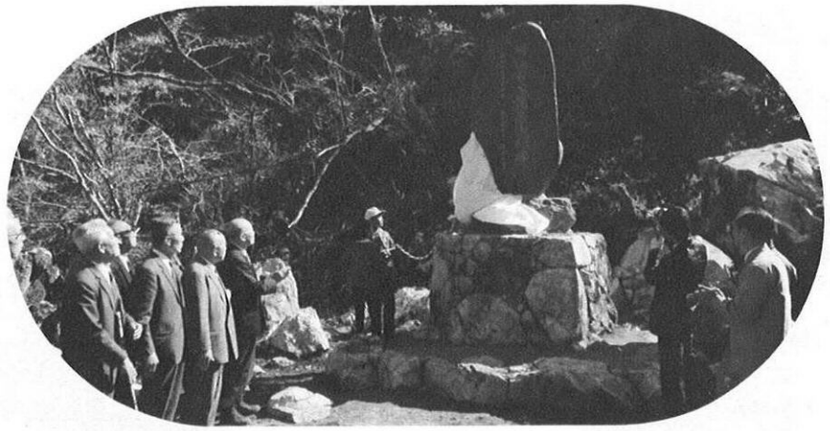
明治百年の記念造林も

明治百年を記念して八代郡泉村に記念林を造成するため、十月三十日、現地の西の岩団地で植樹祭が行なわれた。記念林は明治百年にちなんで百ヘクタールをことしから四カ年計画で植樹されていく。植樹祭には寺本知事や県議会経済委員らが出席、参加者みんなでスギの苗木三百本を植樹した。



上・〝このスギの木は百年後の人たちへのプレゼントだよ〟

右・植樹がすんだあと記念碑の除幕が行なわれた。

下・知事も分校の子供たちといっしょに記念植樹

△ここに人あり▽

擬餌と潜航板

□天草郡五和町二江　吉川智恵人さん

〝引き縄漁業の漁具改良と技法〟というテーマで、吉川さん（四六）が発表した報告が第十三回全国漁村青壮年活動実績発表大会で水産庁長官賞を受けた。この内容はいち早く漁業関係の雑誌などに掲載され、全国のあちこちから問い合わせが舞い込んだ。思いもよらなかった反響に吉川さんは改めてびっくりした。昨年のことだ。

ところで、その発表されたテーマの内容であるが、一口に言うと「ブリ釣りのための擬餌（ぎじ）の改良と潜航板の工夫」なのである。これまでのブリ釣りは一本釣りで、一本の釣糸に一匹の擬餌をつける、いわゆる単純漁法であった。吉川さんは、ブリの習性として、沢山の擬餌があれば、ブリも沢山集まることに着目して、まず擬餌を一本の釣糸に十五本から二十本ぐらいの枝糸をつけ、擬餌も同数にふやしてみた。さらに擬餌の大きさも水深によって使いわけることにした。その結果は、ブリの場合五割も漁獲高が違うことがわかった。

魚の習性を知ること

次に潜航板（釣糸の最末端についているもので、釣糸同士がもつれないようにかじの役目をする）だが、吉川さんは、潜航板を白いペンキで塗った。そして垂直尾翼をつけた。これは、障害物に当って切れた時にすぐ探しやすいためと潜航力を高めるためだ。それと潜航板の大きさを海の深さによってかえることにした。海中の音の感度は陸上より五倍も高いし、魚は音にきわめて敏感だからである。

「こういった、細かい科学的な配慮が必要なんですよ。魚っていうのはデリケートですからね。だましにくい奴ですよ」だましにくいと言えば、吉川さんの部屋には、色とりどりの擬餌がいっぱい飾ってある。海の性質によって、擬餌の色も変えたほうがいいらしい。例えば有明海は赤、島原海峡はダーク・グリーン、八代海はライト・グリーンといったふうに。魚にも色の好みがあるらしい。

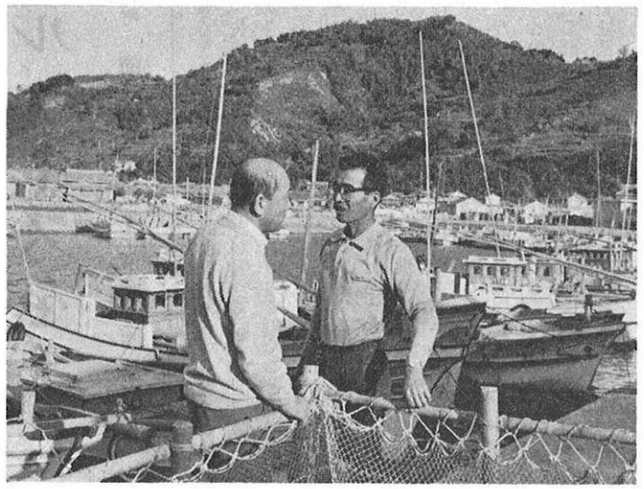
科学する漁法を

以上のような漁具や潜航板の改良は吉川さんの長年の経験と研究の積み重ねによるものだが、本人に言わすれば「二江漁協青壮年グループの面々と一緒になって、ああでもない、こうでもないと、ない知恵をしぼり合って考えついたことに過ぎない」そうだ。とは言っても、吉川さんはもともとエンジニアの素質があった。

十六歳の時、吉川さんは父親に連れ立って大連沖まで漁業に出かけたことがある。その時の港の夜景の灯が美しく忘れがたいものになって吉川少年は単身、大連へ趣いた。そして石油会社に就職し、試験室で石油分析の仕事に取組んだ。兵役。復員。戦後は再び天草で漁業に従事したが、生来の凝り性から、今までの経験的な漁労に満足できず、科学的漁法を研究し始めた。

役立つた「漁労日誌」

吉川さんの手もとに「漁労日誌」がある。これは、ここ十八年間にわたって天草近海の潮の状態、魚の周期、気象などを克明に記録したものである。吉川さん独特の漁具の改良もこれらの集積された体験によって裏付けされ、二江漁協の漁獲計画にもこの日誌は役立っている。この頃では、漁協に県内外からの見学者が見えたり、吉川さん自身、県の依頼で、よその漁協の講習会に話に出かける機会がふえたりで、肝心の漁労もお留守になり勝ち。しかし、吉川さんが今いちばん心配していることは漁業後継者の問題だ。「魅力ある漁業対策を考えることが先決。そして、できればそのためにも、学校の教科に、科学的な漁業問題、エンジンの解体、魚族の性態など組み入れては…」話は尽きない。

一人息子で中学生の一二三君に、もし漁業をやるなら給料制でやろうよ、と申し入れてみたが、まだ確答はないらしい。妻のはつみさんと三人暮しの、春の海のような明るい家庭。ともかくも、吉川さんは眼鏡の奥で漁業への情熱の眼を光らしているのである。

明るい小春日和の二江漁港で……右が吉川さん